

『蒙求和歌』第三類本 本文（一）

——四季部——

小山順子・竹島一希・蔦清行・中島真理
濱中祐子・森田貴之・山中延之

はじめに

源光行作『蒙求和歌』の諸本は、池田利夫氏『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠』（笠間書院、初版・昭和四十九年、補訂版・昭和六十二年）第五章「蒙求和歌の伝本系統と諸本」によって、第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）、両者の混合本と言われる第三類本に分類されている。第一、二類本も含めた諸本全体の詳細は、池田氏著書を参照されたい。

第三類本は池田氏によって山岸徳平氏蔵本、三手文庫本、宮内庁書陵部蔵乙本が紹介されている。池田氏は、第三類本の特徴として以下のような点を挙げている。

- ・冒頭に漢文と和文の序を記す。
- ・卷末に第一、二類本と同じ跋文を記す。
- ・各巻ごとの冒頭に目録を記す。
- ・本文は漢字平仮名交じり文である。
- ・章段の実数は二五〇段である。
- ・章段の内容は第二類本に近い。

- ・「鐘離委珠」（冬）、「郝廉留錢」「長房縮地」（羈旅）、「勾錢投醪」（酒）、「劉寛蒲鞭」（雉）の五段は歌を欠く。
- ・歌のある二四六段のうち、五四段では歌が二首挙げられている。

・第一、二類本で共通する章段において、歌や説話本文が異なっている場合、第三類本では第二類本にしたがっていることが多い。

『蒙求和歌』の本文は、第一、二類本がそれぞれ『新編国歌大観』第十巻に平仮名本（底本・内閣文庫蔵甲本）・片仮名本（底本・国立国会図書館蔵甲本）として収められている。そのほか、第二類本（片仮名本）の善本であり、『新編国歌大観』底本にも用いられている国立国会図書館甲本の影印が『附音増広古注蒙求・蒙求和歌』（中文出版社、昭和四十八年）に、また、同じく第二類本の本である続群書類従本（巻四百五）の翻刻も刊行されている。しかし、第三類本については、第一、二類本が混合したものであり、後出の本文であることも明らかであるため、積極的に研究対象とされることはなく、翻刻されたものも無い。但し、第三類本の本文を明らかにすることで、

第一類本、第二類本の本文についても再考しうる点が多々存すると考えられる（なお、第三類本についての詳細な検討は本翻刻の末尾に付す予定である）。

本稿で底本として用いるのは、未紹介の新出本である山口県立山口図書館本である。山口県立山口図書館本は、豊富な注記と異本注記を有しており、以後、第三類本の本文を考察する上で有益な本であると考えて底本として採用した。

【凡例】

一、底本は第三類本に分類される山口県立山口図書館蔵『蒙求和歌』（所蔵番号 142、国文学研究資料館蔵マイクロ資料 60-50-1、C3683）に拠った。

二、翻刻凡例

- ・翻刻は底本ママを原則とし、合符以外はそのまま翻刻した。
- ・濁点、句読点を私に付し、漢字は通行のものに改めた。
- ・見消し前の本文は（へ）内に記し、その右に訂正後の本文を傍記した。
- ・底本の頭注は【頭注1】のように注記し、和歌のあとに掲げた。割注および傍記も複雑な場合は、【割注】・【傍記】のように注記し、あとに掲げた。
- ・ルビの訓点は（ ）内、ルビのルビは「」内に記した。割注内もこれに準じた。左ルビは（左…）とした。
- ・判読不能な箇所は、□を記し、推定本文を（ ）内に傍記した。

三、読者の便を考慮して、以下の処理を施した。

・各段の冒頭に、通し番号と明治書院新釈漢文大系『蒙求

上下』による蒙求標題、同蒙求標題番号、底本目録の歌題を記す（例・1 漢楚龍顔（五二）（立春））。

・和歌は、一類本（平仮名本）由来のものには、（平1）、二類本（片仮名本）由来のものには、（片1）のように、それぞれ新編国歌大観による歌番号を付した。完全には一致しない場合、（片1）のように記した。

四、【校異】として、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本（国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料（ヤ3-6-4、C3700）に拠る）との対校を行った。ただし、本文における有意の異同のみを注記した。

五、翻刻・校異は次のような分担で行った。

小山順子	序・1	10
竹島一希		11
		20
萬清行		21
		30
中島真理		31
		40
濱中祐子		41
		50
森田貴之		51
		60
山中延之		61
		71

担当箇所は相互に点検を実施した。従って、翻刻・校異については、執筆者全員がその責を負うものである。

本文と校異

蒙求和歌 并序

夫^レ蒙求者李^レ翰之所^レ選也。述^テ数^テ百家之事跡^ヲ以^テ教^レ人^ニ。和歌者柿本之遺流也。聯^ニ卅^ニ一字之篇^ヲ什^ニ以^テ伝^レ世^ニ。如^レ予者、素稟^ニ愚

魯之性^一、雖^レ疎^二和漢之才^一、少日受^テ訓說^一、壯年^ニ求^ム簡要^一、是以[、]《誠》^{（一）}和^{（二）}皇漢之囊行^一、聊^{（三）}呈^{（四）}我朝之風俗^一。飯^{（五）}男女於此文之中^一、訪^{（六）}言行^{（七）}於他書之外^一、寄^{（八）}其詞於花月^一、歌詠^{（九）}二百五十首^{（十）}分^{（十一）}其題^{（十二）}於春秋^一、卷成^{（十三）}二十^{（十四）}《回》^{（十五）}、偏^{（十六）}為^{（十七）}三幼童之易^{（十八）}覺^{（十九）}、不^{（二十）}顧^{（二十一）}耆老之所^{（二十二）}嘲^{（二十三）}而已。于時元久甲子之歲、初秋壬申之月、朝議大夫源光行、閑居余暇慨然記之云爾。

蒙求^一は李翰が意根よりおこりて、ふるきあとをあつめて人に伝へ、和歌は柿本の言葉より采て、あらたなる諺^{（二）}世にひろまれり。こゝに心^{（三）}やまともるこしの道をたもり^{（四）}、詞^{（五）}は花と月との色^{（六）}にまどへるものあり。いとけなく^{（七）}此書をつたへよむといへども、竹の枝にむちをうちて、境をかへり見る事をわすれ、さかりの時、その心をさとらんとすれば、又、柳の葉をあむにものうくして、奥をきはむるに及ばず。中ごろは北關の北に家をわすれて、霜をふみ星をい^{（八）}こ^{（九）}ぐ^{（十）}に暇なく、今は東邑の東にすだれを^{（十一）}ふ^{（十二）}れて^{（十三）}、雪をからげ^{（十四）}、螢をとも^{（十五）}に^{（十六）}する^{（十七）}にたよりあり。時に男女の名をひと巻の内にぬきいで、かしこくをろかなるためしをあまたのふみの底よりうかどひいでたり。歌二百五十をつらねて、卷^{（十八）}一十^{（十九）}〇四^{（二十）}千^{（二十一）}をなせり。〇^{（二十二）}（たどわが心のもよほすにまかせて、人のあざけりの被べきをかへりみずなりにけらし。としははじめの久し^{（二十三）}、〇^{（二十四）}きはきのえのあき^{（二十五）}、のどけきみづのえの月なみと^{（二十六）}ない^{（二十七）}へり。）月なみに紫のさ^{（二十八）}（ほ）げのふでをそめて、白きあさのかみにしるすとなり。異本^{（二十九）}十五

【頭注一】蒙求凡五百九十八人

【頭注二】元久元甲子土御門院

【補入】

父のしるすところはふかしといへども、子のさとする所あきらむためしならし^{（十六）}。

【校異】

- （一）《誠》——試^{（一）}岸
- （二）一十^{（二）}《回》——一十四^{（三）}岸
- （三）こゝに心^{（四）}——こゝに心^{（五）}岸
- （四）たもり——たとり^{（六）}岸
- （五）詞^{（七）}は——詞^{（八）}は岸
- （六）いとけなく^{（九）}——いとけなく^{（十）}岸
- （七）い^{（十一）}こ^{（十二）}ぐ——いたぐ^{（十三）}岸
- （八）《ふれ》て——たれて^{（十四）}岸
- （九）からけ——か^{（十五）}け
- （十）とも^{（十六）}に^{（十七）}する——ともす^{（十八）}岸
- （十一）卷^{（十九）}一十^{（二十）}〇四——卷^{（二十一）}一十四^{（二十二）}岸
- （十二）久し——久^{（二十三）}き岸
- （十三）〇^{（二十四）}きはきのえのあき——ときはきのえのあき^{（二十五）}岸
- （十四）《たど：いへり》——たど：いへり^{（十六）}岸
- （十五）月なみに紫のさ^{（十七）}（ほ）けのふでをそめて、白きあさのかみにしるすとなり。異本——
月なみに紫のさ^{（十八）}けのふでをそめて、白きあ^{（十九）}さのかみにしるすとなり。異本^{（二十）}
- （十六）父の：ならし。——ナシ^{（二十一）}岸

蒙求和歌 第一

春部廿首

漢祖龍顏 立春	丁固生松 子日	孔光溫樹 鹿
干木富義 鶯	安国々器 梅	張敞画眉 柳
史丹青蒲 花	汲黯開倉 皇威	戴勝積薪 巷雨
齊景駟千 春駒	王粲覆棊 掃廊	龔勝不屈 喚子鳥
伯成辟耕 苗代	李広成蹊 桃	麋竺收資 種
壺公謫天 蕙葉	濟叔不痴 應屬	靈運曲笠 藤花
劉寵一錢 款冬	荊訓歴家 暮春	

【校異】
ナシ

1 漢楚龍顔（五二）（立春）

漢楚龍顔

高祖漢高祖、姓は劉、名は邦、字は李。沛県の豊人也。母は劉媪、劉媪が夫は大公なり。劉媪、むかし、大沢の堤にやすみふしたるところに雨ふり神なりけり。夢のうちに神に嫁げり。大公ゆきてみるに、龍そのうへにあり。劉媪これよりはらみて高祖をうみてけり。高祖むまれて龍顔あり。鬚髯センよし。左のもゝに七十二の黒チにあり。時に呂公呂文ナ（リ）（シ）といふ人あり。賢才世にきこえてけり。国の老父酒をもちてきたりあつまりて、常に宴飲して世の中の事をへひひあはせけり。高祖わかきやくしてのころ、きたりのぞめり。座中の人をのゝあざむきわらひて、この座には千の金金をもたざる人は来事なしといひて、むしろのすゑにすへてけり。上客呂公呂公しは、高祖を見て驚て座よりくだりて、

高祖の手をとりて、臣はわかくより好て人を相じき。相ずるところたがふ事なし。君、天子の相ありと云て、座の上にすへてけり。ねんごろにかたらひてわがむすめをあはせんと契てけり。座中の人、目をおどろかさずと云事なし。呂公が妻、大にうけざりけれども、みるところありと云て終にむすめを高祖にあはせてけり。一の男、兩の女をうめり。呂公みちの辺に屋舎をたて、物うる由をして高祖をかくしすへてけり。舎屋は秦の東南にあたり。秦始皇帝、東南に天子の氣ありといきど（な）り給へり。呂公いよ、恐れけり。舎屋をさりて苞陽山（山）の巖の中に隠れぬ。妻たづね来れり。おどろき間に、紫雲をしるべにてきたれりといふ。高祖あはれと思しりぬ。高祖ある所、ことに紫雲聳けり。時に秦皇崩じて、丞相趙高よをとりて、秦皇の長子扶蘇をうしなひて、弟の胡亥を王として二世皇帝とす。趙高心にたがふ事やありけん、わが威の（な）どを（な）しらむとて鹿を馬と云に、群臣みな趙高が詞にしたがひぬ。さて二世帝をうちつ。二世の兄扶蘇の子、子嬰のいとけなきを王として、国既みだれぬ。趙高、子嬰にうたれぬ。子嬰位にある事わづかに四十六日也。楚の壞王、この事を聞て、項羽を大将として高祖を次将として秦の国をうちにつかはす。項羽と高祖と兄弟の契をなして、さきにいらむ人、宮中を行ふべしといひさだめて、高祖先に入といへども、項羽後に入て、契をたがへて万余里をとりて我まゝにせり。高祖千里をとり。壞王をあふぎて皇帝とすべきところに、項羽地をへ（え）て壞王にしらせずして、をのが諸將にわかちあたへて、はてには壞王をうちころしつ。高祖ふかくかなしび（恒）て、天にかわり（千）項羽をうたんとと思ひなりぬ。僅に百余人の將をもちて、百万のいくさにあら

そひたゝかへり。項羽四面をかくみて、高祖あやうくみえけり。
○に^時逆風吹て四方俄にくれぬ。其まぎれにのがるゝ事をえたり。營陽に年をかさぬといへども、陳平張良がはかりごとをもちて、遂に項羽をせめほろぼして^{天下}天下をえたり。高^祖（祖）皇帝^{高祖}とす。父大公をば太上皇帝とす。それ天に無^二一日^一、地無^二三主^一。大公は父たりといへども人臣也。高祖は子たりといへども人主也。人主をして人臣を拝すべきにあらざるが故に、大公みづからおりて高祖を拝せしむ。凡政を行ふ事、仁徳をほどこし給へり。賢者をすゝめ讒者をしりぞけ、能をほめ忠を賞し給へり。かくて四海たひらぎ万民たのしめり。春は和暖の氣とゝのほり、秋は清涼の景そなはれり。すべて高祖より献帝にいたるまで子孫をかさぬること、廿七代四百十八年也。

あめのした行すゑとをき春の色はさはべのくさにあらはれにけり（平^一）
めづらしき春のあさ日はむらさきの雲間を出し光也けり（片^一）

【頭注】

于茲所引註、今流布非蒙求註。盧充幽婚註云、旧註^二引^一孔氏志怪^一曰^云。

【校異】

- (一) 黒にあり —— 黒子あり〈岸〉
- (三) きこえてけり —— きこえて〈岸〉
- (四) 〈つ〉ひあはせけり —— いひあはせけり〈岸〉
- (五) いきと〈な〉り —— いきとほり〈岸〉

- (五) 芭^世碣山 —— 芒碣山〈岸〉
- (六) なとを —— ほとを〈岸〉
- (七) 大将として —— 大将とし〈岸〉
- (八) えて —— えて〈岸〉
- (九) うちころしつ —— うちころし〈て〉〈岸〉
- (十) 〈恒^世〉て —— 慎て〈岸〉
- (十一) 天にかはり —— 天にかはりて〈岸〉
- (十二) みえけり。○に —— みえけるに〈岸〉
- (十三) ほろぼして —— おとして〈岸〉
- (十四) 高祖皇帝 —— 高皇帝〈岸〉

2 丁固生松（二一四）（子日）

典志 丁固生松

【割注】

丁固尚書たりし時、夢のうちに腹のうへに松おひたりとみて、人にかたりていはく、松の字は十八公なり。十八歳にして公たらむといへり。つゐに夢のごとし。

とせあまりやとせの春のゆめさめて子日にあへる松のあけぼの（平^二）

とせあまりやとせふりにし夢ちより子日の春にあふの松ばら（片^二）

【割注】

楚漢^非の代人。為^二項羽將^一。漢書云、丁公、名は固、季布が母弟也^云。

【校異】

ナシ

3 孔光温樹〈三五四〉(霞)

前漢 孔光温樹

漢の長樂宮に温室あり。孔光尚書令としてつかへけり。家にて兄弟妻子など物語するに、朝省の政の事を露ばかへら^り。三もらす^三事なし。ある人、温室省のうちの樹はなにの木ぞとへば、もだして答えず。さらにあらぬ事どもをいひまぎらはしつゝ、それをももらさずぞありける。

おほかたのなをさへはなにちらさじとおもひこめけるやへがすみかな(平3)

みやま木の名をだにあだにもらさじと思ひこめけるやへ霞哉(片3)

【校異】

(一)はかへら^り —— はかり〈岸〉

(二)もらす —— もちらす〈岸〉

4 千木富義〈三一七〉(鶯)

淮南子 千木富義

段の千木隠居して、世のまじはりをこのまざりけり。魏の文侯(二)、千木が賢き^事を知て、頻にめせども、したがはず。文侯(三)、千木が家をすぐる^{こと}に、車よりおりずと云事なし。人々この事をあやしみけり。君いやしくも国の主としてたやすく人をうやまふ事、其心をえがたしといふ。文侯(三)の云く、我は財にとめり。千木は義にとめり。この故に義をうやまふなりとぞ答へ

ける。

うぐひすの身にしむこゑをこめつればたにの戸をさへあだにやはみる(平4)

鶯のあるじなりけるたにのとをみすてゝたゞにすまん物かは(片4)

【校異】

(一)(二)(三)文侯 —— 文隻〈岸〉

5 安国国器〈四五二〉(梅)

前漢 安国々器

安国梁の孝王につかへて中大夫たりき。才智ふかゝりき。財をむさぼりたしなまず。我身よりかしきものを求てしるべとして、君につかへけり。いはゆる^{巴(上)下(下) 非本文}台卿・遂臧・固邦・鄧他みな天下の名士也。このゆへに安国をくにの器といへり。

こゝろあれやまだみぬ里の梅がゝを花なきやどにさそふ春かぜ(片5)・平5)

【校異】

ナシ

6 張敞画眉〈五四一〉(柳)

前漢 張敞(張) 敞画眉 平陽人

張敞、京兆尹たり。経術にあきらかなり。ところどゝに賢をあらはし、善をほどこせり。人の咎をなだめ、事にふれて情ふかゝりき。女の眉をよくつくりければ、長安中に張京兆が画眉と

ぞほめつたへける。ありとある女、このみまなびけり。

みるからにこゝろうつさぬ^二 人ぞなき柳のまゆのあけぼのゝ
いろ^{（平6）}

心をぞたれもそめけるさほひめの柳の眉の曙の色^{（片6）}

【校異】

（一）うつさぬ —— うつりぬ^き〈岸〉

7 史丹青蒲^二（二〇五）〈花〉

前漢 史丹青蒲^二

史丹あざなは君仲、魯国の人也。賢人としてしかも忠臣たりき。

頻によにつかえけり。うつりて侍中たり。時に漢の元帝、太子をすてゝ定陶王に位をゆづらんとす。此事世に聞へて、人おほきにかたぶけども、詞をいだすものなし。史丹おほやけの御とのごもれるうちに入て、青蒲^三の上にふして、皇儲さだまりしうへに横さまの政いできたらば、すでに世の乱となるべしと、なく／＼いさめ申ければ、公これにしたがひ給ひにけり。青蒲^三はあをきがまのむしろ也。后にあらざる人はのぼらずといへり。いづかたに花のあるじをたづね^{ぬらん}けん春のみやまのみち^ちをわすれで^{（片7）・平7}

【校異】

（一）（二）（三）青蒲 —— 青蒲^き〈岸〉

8 汲黯開倉^二（五一三）〈早蕨〉

前漢 汲黯開倉

汲黯は濮陽^二の人也。汲黯にいたるまで七代卿大夫たりき。時に河内に火ありて千余家やけにけり。公、汲黯をつかはしてみせられけり。かへりまいりて申て云く、河内の火屋をならべてやけつきぬ。なげくもの数をしらず。又河内をすぐるに水旱をうれふる貧き物万余家あり。臣謹て御使の使をみて^三倉の粟を開てこと／＼にわかちあたえをはりぬ。臣すでにあやまり。矯制の罪にをこなはるべしと申せり。おほやけ賢なりとほめ給てなし^{（三〇）}。

あめそ／＼はるのめぐみのなかりせばやけのゝわらびものうからまし^{（片8）・（平8）}

【校異】

（一）濮陽 —— 淮陽〈岸〉

（二）みて —— えて〈岸〉

（三）なし —— 罪なし〈岸〉

9 戴封積薪^二（五一二）〈春雨〉

後漢 戴封積薪

後漢の戴封、西華の令たりし時、天ひさしく日てりて、民悉く農耕のむなく断ぬる愁をいだきけり。戴封、我行ふところの乱るゆへに天のとがめ給なるべし。わがなからむには、雨もふり民も豊になりなんと云て、薪を積て其上に臥て焼しんとす。すでに火を放つ時にのぞみて、天これがために大に雨をくだしけり。

身にかへてかを^三おしみける涙かなやよひのそらの雨とひとつに^{（平9）}

【行間書き入れ】 (二)

【行間書き入れ】

雨さそふやよひの空は下もえの煙よりこそくもりそめけれ (片9)

【校異】

(一) かを——かを (岸)

(二) 【行間書き入れ】——雨さそふ…そめけれ (岸)

10 齊景駟千 (五一五) (春駒)

論語 齊景駟千

齊の景公の馬千駟あり。しぬる時、其徳をいふ人なかりきといへり。駟千は四千疋^{〇也}。馬四疋を為^レ駟也。

はるくさの野がひの駒もなき跡ののりのしるべとならばこそあらめ (片10)・平10)

【校異】

ナシ

11 王粲覆墓 (四七〇) (帰雁)

魏志 王粲覆墓 (二)

【割注】

魏の王粲、大臣にいたる。わかゝりし時、人とつれてものへゆく。道のほとりにして碑文をみる。つれたる人の云、汝この碑の文一たび見てそらにおぼえてんやといふ。王粲うしろむきてそらに誦するに、一字もおとさず。王粲むかし、冏基^三の局を

やぶるを見る。王粲もとのごとく石をおきてけり。人これを信ぜず。更に石をおきて一たびみせて、うしろむきて他局に石ををかけて並^{ナラベ}てみるに、石ひとつもをきたがへず。すべて一たびもきゝ一たびも見つる事を、わするゝ事なかりけるなり。

うちみだれ霞にきえてゆく雁のおなじあとをぞおもひつらねし (片11・平11)

非本文割 冏基^八有^レ帰雁之勢^二故云。

【割注】

非本文割 山陽人也。祖曾並^二為^二漢^一王公^一。

【校異】

(一) 王粲覆墓——王粲覆墓 (岸)

(二) 冏基——冏基 (岸)

12 龔勝不屈 (一七三) (喚子鳥)

前漢 龔勝不屈

【割注】

漢の龔勝、こゝろ賢にして名節をあらはせりき。光祿大夫たりき。漢の平帝かくれ給て後、宣帝の玄孫孺子嬰即位の時、王莽先帝のしうとゝして摂政たりしほどに、嬰をすてゝ王莽みづから位につきての比、心ある人をのゝにげ^〇かれて是にしたがはじとす。春は日てり水たえて東作をわすれ、秋は風あらく蝗ふりて西収をゝこたれり。道をしれる人なかりければ、行ふところみだれて国おさまれる時なし。民つかれ兵うへて、金一兩のあたひ^二米三升になりぬ^一。此時に龔勝ふかくこもりぬ。王莽、人のなき事をうれへ、龔勝^{本末}を講学祭酒になしてつかはんと

すれども、やまひの由を答てしたがはず。後に、大師の官綬を以て、郡守龔勝が里に入て致^ス詔。なをかかねてわづらへるよしをもらして、東かしらにして朝服をきて使に語て云く、われ漢の厚恩をうけて報ぜんと思に、年すでに老たり。豈以^ニ一身^一事^二二姓^一、地下見^{ヘテ}故主^ニ哉^三。朝に來り暮來て^三いざなうともいづべからずといひて、まさにしたがはず。又任承君と云賢人あり。身をたばふ心ありて、王莽にしたがはずして寵ぬ。王莽ふか^くや^一。此事を歎て頻に召いださんとすれども、いはり清盲をつくりていず。親き疎き、みなまことと思へり。小兒の謬て井に入を見れども、宿業かぎりありてたすからざらむものゆへ、助けんとせば我いつはりあきしめあらはれなんとて、みずがほにてやみぬ。妻いよくまこととおもひなりて、承君が目のまゑにしてまおとこにあへり。みれども露ばかりも色にいださず。かくてのみすこしけり^五。時に漢の高祖の九代の孫光武、ほかに武威あり。内には仁恵ありて人民悉く帰しけり。軍をこして^六王莽をうちてけり。隠れ籠りし聖賢の人、芸能の輩、こゝかしこより出ぬ。乱たりし政を改て仁徳を行はれけり。いつしか世おさまり人よるこべり。一茎の種をうへて九穗の粟をなせり。殊に賢才を賞しふかく讒佞を退けられにけり。

なにとかくおもはぬ山によぶこどりこしかたにのみかへるこゝろを(片12・平12)

【割注】

王莽^{非本文}へ成帝の舅王舅^子之^〇。初封^ニ新都侯^一以^レ女為^ニ平帝后^一、進封^ニ安漢公^一。遂^ニ即改^ニ元^一建國^一、在位十五年或十八年。

【校異】

- (一) 金一兩のあたひ —— 金一兩あたひの〈岸〉
- (二) 豈以^ニ一身^一事^二二姓^一地下見^{ヘテ}故主^ニ哉^三 —— 豈以^ニ一身^一事^二二姓^一地下見^{ヘテ}故主^ニ哉^三 ^ヤ
- (三) 暮來て —— 暮來て〈岸〉
- (四) ふか^くや^一 —— ふかく〈岸〉
- (五) すこしけり —— すくしけり〈岸〉
- (六) 軍をこして —— 軍をこして〈岸〉

13 伯成辞耕(五四七)(苗代)

世^非伯成辞耕

伯成あざなは子高、諸侯たり。堯天下をおさめて舜に讓給。舜又禹にさづく。禹又子高に讓といへども、世の中をよしなき事に思ひとりて、子高、諸侯を辞して、田を作てしづかによをわたりけり。

こゝろをばなはしろ水にさそは^{【傍記1】}せてよをうき草のねをたえてける(平13)・【傍記】(片13)

【傍記1】

ながしつる^{【傍記2】}イ

【傍記2】

世にすむみちをおもひかへし^{【傍記1】}て^{【傍記2】}イ

【校異】

(一) なかしつる^{【傍記1】}イ —— なかしつるイ〈岸〉

(二)世にすむみちをおもひかへし(て)イ——世にすむみち
をおもひかへしてイ(岸)

14 李広成蹊(二六八)(桃)

前漢 李広成蹊 【割注】

李広、ゆみやの道にかしこかりければ、戦の功よゝにかさなり
て將軍にうつされにけり。大史公が云、余觀^ニ李將軍^ヲ、徇^{シユ}々如^ニ
鄙人^ノ、口不能^レ導^サ辭といへり。死る時、天下にしろもしらざ
るも是をおしみてかなしみをつくせり。よの人諺に云、桃李不^レ
言^ニ自成蹊^トといへり。李將軍、おやを虎にくはれて野べを^{ドモ}
ゆくに、草の中に虎ありと見て、是をいつらぬきてけり。其矢、^{非本文}
飲羽といへり。近くよりてみれば、虎にはあらず、大なる石な
りけり。石と見て後にいるに、其矢たつことなし。おやをくら
ひし虎と思ひけるによりて、石をいつらぬけるなり。
もゝのはなもののいふことはなけれどもいろにいでゝぞ人をさ
そひし
ものいはぬ花も人めをさそひけりみちもさりあへぬ^ニもゝの
下哉(片14)

【割注】

隴西成^レ紀人也。(一)

【傍記】

本文出獵^ストイヘリ。

【校異】

(一)自——目(岸)
(二)さりあへぬ——さりあへ(す)(岸)
(三)隴西成^レ紀人也——隴西成犯人也(岸)

15 麋竺收資(四三七)(雉)

蜀志^ニ 麋竺^ノ收資

麋竺、^{魏志^ニ之説}むかし、京より車に乗て家にかへる。いまだ家にいらざ
る事数千里なるに、一人のわかき女、かちより歩くるにあへり。
麋竺あはれびて車にのせてけり。此女かへらむとするにのぞみ
て、我はこれ天の使として東海の麋竺が家をやきにゆくなりと
いふ。麋竺あさましと思ひてまどひ帰て、家の中の財を運出て
人をいだしてまつに、日中に火いできて家やけにけり。
子をおもふきゞすや野べにまよはましくべき春をかねてし
らずは(平14)

いかばかり子を思ふきゞすまよはましくべき野べをけふ
(ぞ)こしらずは(平15)

【校異】

(一)けふ(そ)——けふと(岸)

16 壺公謫天(三二五)(董葉)

後漢 壺公謫天

壺公は其姓名をしらず。汝南の費長房は市の掾なり。時に葉を
うる人あり。葉をうるに直を限事なし。一^{以下本^ニ其多}のつばを屋のうへに
をきて、日入て後にとびて壺の中にいる。人これをみる事なし。
長房のみぞ楼の上にゐて見ける。たゞものにあらずと知ぬ。壺

を身にし（た）がふる（二）ゆへに壺公と云也。長房、壺公がゐたるあたりを掃ひきよめて餅をすゝむる事、たびかさなりけり。壺公、長房がなさけを思ひしりぬ。日の入ほどに長房をよびて、我つぽにいらむを見て、われと共にをどりいれとをしふ。長房ともに壺に入ぬ。内に楼観（本文）五色にして重門閑道あり。左右侍者おほし。壺公が云、我は仙人也。天曹職をつかさ取て、すぶる所おほし。つとめをこたる事あるゆへに罪をえて謫せられて、暫く人間に来れる也と云て、仙術をしへんと（三）契れり。

たび人のやどかる野べのつぽすみれおもはぬ春の日かずをぞつむ（片16・平15）

【校異】

- (一)し（た）かふる——したかふる（岸）
(二)仙術をしへんと——仙術をおしへんと（岸）

17 濟叔不癡（三九一）（躑躅）

濟叔不痴

晋書 晋代太原人也 身の長七尺八寸 龍の類 大なる龍あり。

王湛、あざなは処冲といへり。賢才人にすぐれたれども、色にあらはす事なければ、兄弟家族といへども、王湛を痴なる者と思へり。父昶（世充反云痴）ひとりのみ是をしれりけり。父（本文）死て後、墓の辺にいほりをむすびて、門を閉て閑によをすゞして、世の交をこのまづして、昔を恋つゝ涙をながしてあかしくらしけり。王湛が兄子（サイ）濟（三）と云ものあり。王湛が許（キト）にゆきて見ければ、床のほとりに周易ありけり。本おもひあなづりける心にて、是をば何にゝかはせんと問へば、王湛あざわらひ、思ふところあるにゝたり。遂に易を論じて、濟つまりけり（三）。武帝、濟を見給ふ

ごとに嘲て、汝が（四）家の痴叔はしにきや、いまだ（五）やと問ひ給へば、濟こたへ申かたなし。後になをとひ給時、臣が叔ことにをるかならざりけり（五）の申由。かさねて誰とかひとしき（六）き問給けり。濟申て云、山濤已下、魏舒（ヨリ）已上と申けり。これより名をあらはせり。やへこむるかすみのそらのいはつゝじいはねばこそあれふかき心（平16）をふみかよふ山ちとだにもいはつゝじいはねばこそあれふかき句（七）を（片17）

【校異】

- (一)父——父（文）岸
(二)兄子（サイ）濟——兄子（サイ）濟岸
(三)つまりけり——つまりにけり岸
(四)汝か——痴（カ）か岸
(五)申由——申岸
(六)ひとしき（キ）——ひとしきと岸
(七)句を——句を岸

18 靈運曲笠（三〇七）（藤花）

世説新語 靈運曲笠

謝靈運、このみて曲柄の笠をもちあけり。孔隱士そしりて云く、汝が心にすなほならむ事を思へり。曲れる物をすてざる事、汝が身にゝずといへり。靈運答て云、己が身（ミミ）のかげををちにくむ人ありき。をのがゞげをゝづべき物にあらず。至て愚なる人といひつべし。曲れる笠は枯木のまどひまがれるなり。心のまが

れるにあらず。もし枯木のまがれるかげを嫌ひにくまば、是則かげを畏し類也。我は身の影をゝづる心なれば、曲れる柄の笠をすてずといへり。

影をゝづる人と云るは、昔漁父の孔子申て云く、かげをみてわけ走人あり。足をあげてはやく走に、影も随てはやく身をせめて弥はしるに、我は尚をそく、をふものはやき心ちして、力をつくして走に、息たえて死ぬ。いたりてをろかなるためしをいへるなり。

みかさ山まつのよこみをいまぞしるいろこきふちのしたのこゝろを(平17)

【校異】

- (一)嫌ひ——嫌へて(岸)
- (二)類——類(岸)
- (三)わけ——にけ(岸)
- (四)はやく——はやし(岸)
- (五)よこみ——よこえ(岸)

19 劉寵一錢(五七九)(款冬)

後漢 劉寵一錢

劉寵、会稽の守にうつる。後に(古)て為将作大匠、おもむきけり。若耶溪の中に、五六の老翁の、年みな七八十ばかりなる、あひひきゐて劉寵を送けり。各錢百づゝをもちたり。劉寵、これをと(し)ば(し)人の財を貪るにたり。是をとらずは人の志をうしなふになりぬべしと思へり。時に人ごとにひとつの錢をぞ取てける。国にゐる(し)程の人費を借て人の許へゆくことも

なかりければ、夜ほゆる犬もなしといへり。後に召て為将作大匠。

ひとふさを家づとにせしやまぶきはあでのかざしのなもぞおるとや(平18)

家づとに一ふさおりし山吹の花に色あるあでのたび人(片19)

【校異】

- (一)(古)て——召て(岸)
- (二)と(し)は——とらは(岸)
- (三)ある——ゐたる(岸)
- (四)為将作大匠——為将作大(将)イ(岸)

20 薊訓歴家(三二六)(暮春)

神仙伝 薊訓歴家 後漢の人

薊訓は齊の国の人なり。心ある人、薊訓が道に賢き事を知て、各ゆかしく思て、争かあひみんと云に、次の日、廿三家に同時に来れり。家ごとに顔の色も衣の色もかはらず、身をわけゝるなるべし。後に(二十)乗て東をさしてかへりさるに、貴人各馬をもて遂ゆく事半日、をの(疲)疲て帰にけり。薊訓、昔隣人の児をいだきて、とりはづしておとしてしにけり。母さけび泣てうづみてけり。次の日、薊訓ゆきてほり出して、いきたる本の児をいだきて母に返しけるに、母まこと思はず疑をなすといへども、児おやをしれり。かはる事なかりければ、かぎりなくよろこびけり。

こち風のかへるくもぢをしたひきてなごり身にしむあふさかのはる

やどごとにおなじなごりを忍ぶかな春の別の夕暮の空（片20）

【校異】

- （一）次の日——次の日（岸）
（二）青驪ラ驪に——驪に（岸）
（三）二十余日トアリ次の日——次の日（岸）

蒙求倭歌第二

夏十五首

辛毘引裾 更衣	孟嘗還珠 抑花	漆室憂葵 葵
樊噲排闥 水廂	漂母進食 郭公	時苗 留 ○憤 高蒲
常林帶經 草苗	高鳳漂麦 鹿立	陸績懷橘 康橘
車胤聚螢 螢	卞和泣玉 輝	田單縱牛 蚊遣人
黃香扇枕 扇	西施捧心 夕顔	魏顆結草 夏草

21 辛毘引裾（七〇）（更衣）

魏志 辛毘引裾 【割注】

辛毘^{（一）}、潁川の人也。おほやけ、冀州の人戸を河南に遷さんと仰られるを、^{（高）}□も^{（三）}賤もうれへなげきけり。辛毘 侍中として人の愁をかへりみて諫め申に、おほやけ、御氣色たがひて立て入給を、御裾^{モスツ}をひかへて、君を思ひたてまつるゆへに、世の痛みを申也。是をもちゐ給はざらん事は我身のためにあらざと、なくく諫申けるに、哀とおぼして此事をとどめられにけり

たがためもうらなかりけりなつごろもよをはぐみしなさけ

のみかは（片21）

【割注】

私云、魏^{（三）}辛毘、字ハ佐治也。

【校異】

- （一）辛毘——辛毘は（岸）
（二）^{（高）}□も——高も（岸）
（三）魏——魏（岸）

22 孟嘗還珠（四七三）（卯花）

後漢 孟嘗還珠

後漢の孟嘗、字は伯周といへり。合浦の太守たり。郡には田などつくる事もなし。珠ばかりを財として世をわたるところなり。さきのつかさ、政よこさまにして、人をわづらはし、珠をむさぼるゆへに、人しりぞき、珠交趾にうつりにけり。孟嘗、心清潔にして食ところなきゆへに、退し^{（一）}来れり。さりにし珠^{（三）}かへりにけり。郡とみさかえて昔のごとしといへり。

あれはてしかきねのうつぎ^{（三）}花さきてむかしにかへる玉川のさと（片22）

【校異】

- （一）退し——退し人（岸）
（二）さりにし珠——すみさりにし珠（岸）
（三）うつき——う^{（つ）}えき（岸）

23 漆室憂葵（二六四）（葵）

吉列女云 漆室憂葵

魯の漆室の女は、時をすぐるまでおとこにも見えざりけり。夕の空の心細きに、柱によりかゝりてうそぶきたてりけるを、隣婦あやしと思て、何事にうそぶきかなしむぞ。人の恋しきかと問に、我魯の君の老衰て太子のいと《な》なき事愁るなりと答へけり。隣婦が云、それは大夫の愁なり。汝がことにをよばずといへり。女の云、しかはあらず。昔よのおさまらざりし時、晋の客わが家にやどりて、馬を苑の中につなぎしに、馬はなれて葵をふみからしき。我年をふるまで葵にともし。我兄隣女をふ。道にして水にをぼれて死き。我身ををくるまで兄なし。みなこれよのしづかならざるゆへなり。我きく、河浸^{調流}里^{帝本}、漸如^三三百歩。今魯の君老衰給て、太子はまだ^四いとけなくおはします。国乱て君臣父子その辱をかうらん^五に、婦人ひとりのがるべきにあらずと答けり。

いかにしてのどけきみよにあふひ草そのかみ山をおもひしるにも（片23）

ありしにもあらぬおもと^六にあふひ草昔をかけて忍けふ哉

（平21）

【校異】

（一）いと《な》なき——いとけなき《岸》

（二）愁るなりと——想^愁るなりと《岸》

（三）如——珈《岸》

（四）太子はまだ——太子いまだ《岸》

（五）かうらん^むに——かふらん^むに《岸》

（六）おもと——たもと《岸》

24 樊噲排闥（六九）（水鶏）

前漢樊噲排闥

樊噲は沛国の人。漢の高帝の忠臣たりき。高帝位につきて天下を取て後、病ありとて、人のおほく参事をにくみて、一人のつかさ人を身にそへ給て、勅を下て門戸をまぼらせて群臣をいれられず。樊噲よのため是を敷て、推て門戸を開て近く進み参て、涙をながして諫申て云、君の世をとり給し始より、したがつひかへて忠ありき。天下すでに定まりぬ。君その御病を大臣をちおそれ申。群臣にまみえ給て共に謀をめぐらし給べき処に、一人をのみちかづけて、群臣にうとまれ給はむ事の心うく悲也。昔趙高がゆくゑをばしり給はずやと奏するに、おほやけわらひておきあて、是にしたがひ給にけり。

かきくらす心のやみもあけにけりまきのいた戸をたゝくくひな^四に（平22）

【校異】

（一）高帝——高祖^帝《岸》

（二）君その御病——君の^御病《岸》

（三）まみえ給て——みえ給て《岸》

（四）たゝくくひな——たゝくひな《岸》

25 漂母進食（三二三）（郭公）

前漢漂母進食

流布本下巻アリ

韓信は淮陰（一）の人也。わかき時、家まづしかりけり。下邳（二）と云所に行□□家をつくりけるに、漂母（三）来て韓信をうやまひあはれびて、をのれが家に入てやそめ（四）になくさめ、食をすゝむる事、日数かさなりにけり。韓信、是がなさけを思知て、報せんと云に、漂母が云、我王孫を哀むゆへに、君が事のをろそかならざるなり。報みん事をばのだまずと答けり。後に韓信、楚王として下邳に都として、漂母を召て百金を給ひけり。

あはれこそ（五）おもひしりけ（六）（へり）（七）ほとゝぎすかたらひなきしいにしへのころ（八）（片24）・（平23）

【校異】

- （一）行□□——行て（岸）
- （二）やそめ——やすめ（岸）
- （三）あはれこそ——あはれとそ（岸）
- （四）おもひしりけ（へり）——おもひしりける（岸）

26 時苗留犢（六七）（菑蒲）

魏略時苗留犢

魏の時苗は清廉のきこえあもし（一）なり。寿春の令として任に赴く。はじめ、輿車（二）黄犢牛、くにゝして一の犢をうみてけり。時苗、年限きわまりて任をさる時、犢をとどめて云、此土の生せる所也。かるがゆへにとゞむといへり。

このさとにねがす沢べのあやめ草みやこにいかゞひきうつすべき（片25）・（平24）

【傍記】

乗二薄輦車一。流布本

【校異】

（一）あもし（二）——ありし人（岸）

27 常林帶經（四五七）（早苗）

魏書常林帶經

常林わかくして書生たりき。漢のすゑに世おほきに乱て人やすき事なかりけり。時に常林田野に籠て書を身にそへて田を作けり。其妻かれいひをもて行て、敬ふ事主のごとくしけり。後に位大常の博士にいたりにけり。年八十三にてうせにけり。

しづみてもふゝる道をうれしとや山田のさなへおもひとりける（片26）

【校異】

ナシ

28 高鳳漂麦（四五八）（晩立）

後漢高鳳漂麦

後漢の高鳳勤学の人なり。其妻とかくして貧き世をわたりけり。麦を庭にさらして雀鷄を追へとて竿を高鳳にあたへて妻は市へ出にけり。時に雨俄に降てむぎながれにけり。妻いちよりかへりて大にうらみければ、我あやまてり、書を読つる程に雨のふる事も麦のながれつらむ事もわすれにけりと云てわびなげきけり。おほやけきゝ給て文道にこゝろさせる事をほめ給て車をやりて召どもいつはりのがれてまいらず。妻と田を作て籠めにけり

り。

ゆふだちの庭のちぎりもわすれ水ふかきながれをくむとせしまに（片27）

【校異】

ナシ

29 陸続懷橘（一四〇）（廬橘）

異志 陸績（）懷橘

陸績（三）、六歳にして袁術が許に行けり。橘を取出たりけるを、陸続、ふところに入ておがみけり。袁術とひければ、母にあたえむためなりとぞ答ける。

たち花のまだうらわかき梢にも身にしむ風の色はありけり（片28）

【校異】

（一）（二）陸績——陸続（岸）

30 車胤聚螢（一九四）（螢）

車胤聚螢 【割注】

車胤、わかゝりし時、書を好て読に、家貧くして油なかりければ、螢を集て、絹の袋に入て、燭とせり。後に司徒にいたりにけり。

ひとま^きをあけもはてぬ^にか^にあけにけりほたるをともす夏の夜のそら（片29）

【割注】

晋代大臣也。河東人也。位至大司空。同人、晋書五十三卷（三〇）。

【校異】

（一）はてぬ^にか——はてぬに（岸）

（二）五十三卷——五十三卷（岸）

31 卞和泣玉（九四）（蟬）

卞和泣玉

此事、異説甚多。

楚人卞和、楚山の中にて一の玉璞をえて厲王に（二）たてまつる。玉作にみせらるゝに、石なりと申。王いかりて卞和が左の足（三）をきられぬ。後に武王、位につき給ぬ。卞和、又此玉を奉る。玉作にみせらるゝに、是はさきにも捨られたりし石なりと申す。王いかりて、左の足（三）をきられぬ。後に成王、位につき給ぬ。卞和あらたまを懷て、楚山のふもとに三日三夜血の涙をながして泣ゐたり。王、此事をゆへあるらむとさととりて玉を召て、玉作に仰てみがゝせらるに（四）、光上古にすぐれて和氏璧（五）とぞ聞えける。琴操云、卞和が玉、始は懷王に奉つる。次に平王に奉つる。次に平王の子、位につきて、玉をみがきあらはされて、卞和を陵陽侯（六）となさるれども、辞してさりぬといへり。日にみがくみねのこずゑになくせみのこゑこそ玉のひかりなりけれ（片30）・平27）

【校異】

（一）厲王に——文王に（岸）

（二）左の足——右の足（岸）

(三) 左の足 —— 左の足 (岸)

(四) みかゝせらるに —— みかゝせらるゝに (岸)

(五) 和氏璧 —— 和氏璧 (岸)

(六) 陵陽侯 —— 陵陽侯 (岸)

32 田単火牛 (一六三) (蚊遣火)

史記 田單縱牛

田單城を守て燕の軍をふせぐに、牛千頭を取て、赤き(詩 繪衣) (二) に五色の (三) 絵かきてきせて、角に油をそゝげり。其上に兵刃 (三) つけたり。尾に葦をつかねて、其さきに火をつけて夜牛を放て、壮士五千人をしりに立ておはしむるに、千頭の牛、火のあつくなるにしたがひて、咩いかりて燕の軍の中に走り乱れ入て (四)、兵しかしながら騒ぎにどふ (五) 龍かとのみぞみえける。牛のあたるところ死傷せずと云事なし。田單に賞を行はれて平侯君とす (六)。

なにはがたあしおりくぶるかやりびの煙をうしとおもひける
かな (片 31・平 28)

【校異】

(一) (かゝり) —— かゝり (岸)

(二) 五色の —— 五色に (岸)

(三) 刃 —— 刃を (岸)

(四) 乱れ入て —— 乱れ入に (岸)

(五) 騒きにとふ —— 騒きまどふ (岸)

(六) 平侯君とす —— 平隻君とす (岸)

33 黄香扇枕 (四四二) (扇)

後漢 黄香扇枕

黄香は孝子也。夏の日のあつきには (父本文) 母の (二) 枕をあふぎ、冬の嵐のさゆるには母の床をあたゝめけるなり。九歳にて母にをくれて悲びうれへければ、里の人きたりつどひて助けあはれり。

あふぐべき人なき身こそかなしけれおなじまくらに夏はきに
けり (片 32)

しでの山こそ思ふやみの枕にも (二) 扇の風を思ひはたらん (平 29)

【校異】

(一) (母) の —— 母の (岸)

(二) 枕にも —— 枕 (を) も (岸)

34 西施捧心 (一五二) (夕顔)

莊子 西施捧心

西施はみめかたちたぐひなかりし女也。病に臥てむねをうさへて目をひそめければ、いよ／＼こゝろぐるしくいたはしきさまなりけり。其里のみにくき女ども、是をうらやみて、そらむねをやみて目をひそめけり。西施が顔色こそいかなるにつけてもいみじくあてなりけり (二)。みにくき人、目をひそめける病すがた、いとおそろしくぞ見えける。

ゆふがほのたそかれどきのそらめにもたぐひにすべき花のなきかな (片 33・平 30)

【校異】

(二) あてなりけり——あてなりけれ(岸)

35 魏顥結草(一五四)(夏草)

左伝 魏顥結草

魏顥は武子が子也。武子に寵妾ありけり。武子、病つきける始に魏顥をよびて、吾死なむ後は、此妾を汝が妻に^{〔傍註〕}していとをしくせよと云けり。其後病をもく成てもとの心もわすれて、我しなば、妾をも殺て同ひつぎに入よと云て、武子死にけり。魏顥おもはく、狂乱の時のことをもちあるべきにあらず。正念の詞に随はむと思へり。さて妻にしてけり。後に秦の国の晋の国とみだれ戦に、魏顥、晋の将として秦の軍にむかひあふに、旅宿の夢の中に一人の翁、草を結て秦軍をふせぎて去ぬ。朝に秦の軍、大に破にけり。其夜の夢に此翁又来て、我は汝が妻の父なり。汝、道を知りさとあるゆへに我むすめをころさずありしうれしさに、来てむくひつるなりと云つゝ去ぬ。さめて後、此事を思ひあはせけり。

(片 34)

夏くさのなびくす急葉をみつるかなしげみをむすぶ夢の枕に

【傍記】

必嫁^{セシメヨ}是^ヲ 本文

【頭注】

以他嫁為自嫁誤矣。

【校異】

ナシ

蒙求倭歌第三

秋部廿首

張翰適意^{立秋}

袁翰却座^{女郎花}

息躬歷詆^{劉萱}

鳴鶴日下

公超霧巾^霧

真長望月^月

桓景登高^高

郝隆曬書^{七夕}

廉頗負荊^荊

廉范五袴^蘭

士龍雲間^鹿

顏駟蹇剥^極

伯瑜泣杖^{擗衣}

離朱明目^{紅葉}

季倫錦障^秋

楊脩捷^{對薄}

蘇武持節^雁

楊宝黄雀^露

鄭莊^三置駟^{御迎}

軻親斷機^虫

秦彭攀轅^{暮秋}

【校異】

(一) 捷對——捷對^捷(岸)

(二) 鄭莊——鄭莊^莊(岸)

36 張翰適意(四八七)(立秋)

晉書 張翰適意

張翰、齊王にめされて東曹掾たりき。齊にある時、秋風の颯然として初ていたれるに、江南の菰菜のあつもの、鱸魚のなますを思出て、俄にかへらむとす。人、留れどもきかず。人のたのしむ事、心に適^{カタギ}(一)をよしとす。公、事に羈^{カガミ}れて数千里に^三わしりて、官位を求てなにかせんと云て江南にかへりぬ。其後ほどなく齊王ほろび給にければ、時の人、張翰は世ひさしかるまじき事を兼てさととりて去にけるなりとぞ云ける。

ふるさとのなにはの浪におもひたつおりしも袖に秋のはつかぜ（片35）

【校異】

- （一）適——叶（岸）
（二）に——を（岸）

37 郝隆曬書（七二）（七夕）

世説 郝隆曬書

【割注】

郝隆、文道に賢にして、広く学び深くさとりし人也。七月七日たなばた祭に、余人書を曬しけり。文章をえんがためなり。時に郝隆、庭に仰ふして、腹をさらしけり。人、其ゆへを問ければ、我腹の中なる書をたなばたに借なりとぞ言ける。

七夕に身をぞかすべきころよりほかにはふみのあらばこそあらめ（片36・平33）

【割注】

私云、郝隆、字ハ仕治也。

【校異】

- （一）言ける——答ける（岸）
（二）仕治——泣治（岸）
（三）（注記末尾に）佐理（岸）

38 季倫錦障（三四七）（萩）

晋書 季倫錦障

晋代人

季倫は石崇が字也。家とみ財豊なりける。時に、王愷と云人、紫の歩障をつくる事、四十里につゞきけり。みる人、目をおどろかしけり。季倫、錦の歩障をつくる事、五十里にをよべり。かれに敵しけり。

むさしのは萩のにしきをおらぬまぞわかむらさきにしかじとは見し（片37・平34）

【校異】

- （一）なりける——なりけり（岸）
（二）紫——柴（柴）（岸）
（三）歩障——歩（陣）（岸）

39 袁盎却座（八三）（女郎花）

前漢 袁盎却座

【割注】

漢の文帝、上林のみゆきに、慎夫人といへる女御、かたはらにあり。袁盎、たちよりて夫人の座をしりぞけり。おほやけ、御けしきかはり、夫人、いかれるいろあり。袁盎がいはく、おほやけは后あり、妾あり。夫人は妾なり。妾はおほやけと床を一にする事なし。むかしの人彘がためしを思知れと云けり。夫人、此事を悟て、かへりて悦けり。おほやけ、袁盎が賢き心をほめて、金五十斤を賜はせけり。人彘がためしといへるは、漢高祖の後呂太后の、太子孝恵をうめり。又、戚夫人が腹に趙王如意をうめり。戚夫人、御志のふかりけるが故に、東宮の孝恵をすて、趙王を位につけんとときこえけるを、呂太后もなげき世の人もかたぶきにけり。張良はかりごとをめぐらして、商山の四皓を語に、四皓、山より出て東宮へ参にけり。高祖これを

見給て、四賢ひとつ心に來、たすけたてまつる事を心にくきことにおぼして、趙王を位につけ給べきことを思ひとゞめ給ぬ。

高祖かくれ給て後、孝恵、位につき給ぬ。呂太后、趙王をうしなひ、夫人を失はむとするを、孝恵帝、なさけふかき心にて此事をさとて、趙王を身にそへ、夫人をはぐみ給へども、帝、弓い給ふおり、趙王のひとりみ給へるを伺て、鳩酒チンシユをのませて殺してけり。夫人をば足手をきり身ミをふすべ、葉をぬりて鬼の様に作りなして、廁の下に置いて人彘と名づけけり。恵帝、悲び愁へ給けり。鳩酒と云は、毒酒なり。鳩と云鳥あり。蛇をのみくらふなり。其鳥の毛を入たる酒なり。又、鳩の羽を酒に入れて、のませてころせりともいへり。恵帝、此後、世の政をおこなはず、病に沈み給にけり。人彘が靈、呂后を取殺てけり。父呂公、昔、呂后を見て云、幸貴の身なれども、千夫の相ありと云りけり。高祖一人の外にみえたる人なくして死しぬ。墓におさめて、帳床屏風のかざり、いけりし時のごとし。翌日、狩獵の人千余人、たかをすへ犬をひきて、雨にあひて日くれぬ。つかを破てをのゝあつまりやどれり。内に美人あり。ものいふ事なし。其身を搜ソグるに膚あたゝかにして、なつかしきにほひありければ、ひとりふたりちかづきあひにける程に、見うらやみつゝ我もゝとあらそふほどに、九百九十九人にあたるたび、其身とけ失にけり。狩人、たれと云事をしらず。後にこそ呂后とはしりにける。高祖を加て千夫の相むなしからずぞありける。

をみなへし玉のいがきはこゝろせよさてぞむかしも宿ヨにしほれし（片38）

【割注】

私云、袁盎、字は子孫※也。（四）

【校異】

（一）身——耳（岸）

（二）後にこそ——後にそ（岸）

（三）宿——露（岸）

（四）子孫※——子孫（岸）

40 廉頗負荊（五二一）（荻）

史記 廉頗負荊

趙の將軍廉頗、藺相如（可）賤位にてかみにある事を憤けり。相如この事を聞て、廉頗が出る時は病といひなしていざりけり。後に道に出て行あひにけり。藺相如、車を退けてかくれ去ぬ。舍人が云、廉頗惡言をいだせり。庸人猶はづべし。況や將軍として、をそる事ふかゝるべきにあらざるをやと告しらせけり。相如が云、我秦王の威ありしをだにも往てなをしづめき。廉頗をおそれをづるにあらず。秦の我國趙をせめぬ事は、我と廉頗とふたりの將軍あるを怖る故なり。たとへば二虎戦ひあらそはゞ（三）、その勢ともにいくべからず。我國のために身をすてん事を先にして、私の敵をむくぬ事を後にすと答けり。廉頗、此事をもれ聞て、恥かなしみて荊スベを負て相如が門にいたりてつみを謝しけり。以て、少人宜く淺輕にして敢て侮イロシ君子（二）焉。

ともすればそよぐれのをとかへてのきにおれふす萩※の
下かぜ（片39・平36）

【校異】

- (一) 〈可〉^か — か 〈岸〉
 (二) あらそは^ゝ — あは^ゝ 〈岸〉
 (三) 萩^萩 — 萩 〈岸〉

41 楊脩捷対〈二一九〉(薄)

後漢 楊脩捷対

楊脩、魏王曹操が主簿たりき。江南にいたりて曹娥が碑^碣の文をみるに八字あり。黃絹幼婦外孫壘^レ曰とかけり。曹操是をさと^レりえず。楊脩しれりといへるを、しばしと云てありし。ゆく程に三十里にしてさと^レりえたり。先楊脩にとかしむるに、楊脩が云く、黃絹は色の糸なり。色の糸は絶の字也。幼婦は少女也。少女は妙の字なり。外孫は女子也。女子は^三好の字也。壘^レ曰は受^レ辛也。受辛は^萩の字也。四字につづめて絶妙好^萩と云へり。曹操これ^ヲを聞て、我さと^レれるがごとしとほめけり。

みるからにするとやはあらぬいとすゝきほどへてたれか思ひときける (片40)

見るほどもなかりし野べの秋風に露もおときぬ^四 糸薄かな^五
 (平37)

【頭注】

碑^本背^文二有^二八字^一。

【校異】

- (一) ありし — 案し 〈岸〉

(二) 女子は — 女子 〈岸〉

(三) 〈舜^舜〉 — 舜 〈岸〉

(四) おときぬ — おときぬ 〈岸〉

(五) 糸薄かな — いとすゝき哉^イ 〈岸〉

42 息躬歴詆〈六四〉(刈萱)

前漢 息躬歴詆

【割注】

漢書云、息躬は容姿うるはしく、心人に恥られたりき。世に佞臣は進み賢人は退く事を、よのつねの詞にはかたぶきけり。丞相、王嘉をばすくよかなるに^レたれども、蓄縮たり。もちあるべきにあら^レずといひ、御史大夫賢達^{賢達}をばよは^レくして、其職に堪^任ずと云ひ、左將軍公孫祿、司隸^{司隸}鮑宣をば、皆外にはすなほなるきこえあ^れる^レども^三、内にはをろかなる心ありて、政の道をさとらず。時の諸官、いづれも頑にしかぞふるにたらず。俄に強き兵の、世をえたらんとせんに、誰かしづむるはかり^レことをめぐらさむとぞ世をそしれりける。

ゆふ風のふきもみだらばいかゞせんまがきあだなる庭のかるかや (平38)

【割注】

私云、息夫躬、字ハ子徴^三、詆^{セメテ}二大臣^一云。

【校異】

- (一) 司隸 — 司隸^{司隸} 〈岸〉
 (二) あ^れる^レとも — あれとも 〈岸〉
 (三) 子徴 — 山徴 〈岸〉

43 廉范五袴（五八〇）（蘭）

後漢 廉范五袴

廉范、蜀郡の太守にうつりて事を行ふ。国豊に民やすからむ事をのみおもへり。さきの司が事に触て国を乱りけり。夜火をふせぐにも、人の煩をなしけり。廉范は先の政をあらためて、人を憐ぶ心ふかゝりければ、家々に水を設て火をふせがしむれば、人の煩なし。時に、民うたひて云く、
廉叔[○]来^ルコト、何^ニ暮^ス。不^レ禁^ス、人安^{イフシツカシム}措^ハ。昔日ハ無^ニ一^ノ襦^{ウズ}、今^ハ有^リ五^ノ袴^{ハカマ}。
日にそへて秋のあはれはおほえ山いくのともなきふちばかまかな（片41・（平39））

【傍記】

火安^ス作^ツ平生 流布本

【校異】

ナシ

44 蘇武持節（二六九）（雁）

前漢 蘇武持節

蘇武、漢王^{武帝}の使として、匈奴をせめに赴て忠節をつくす程に、かへりて多びすに取籠られにけり。匈奴の王单于、蘇武をおびやかしてしたがへんとするに、漢の節をうしなはずしてひざまづかず、猶、剣をかゝやかして責れども、蘇武堂々として云、
我、漢の使なり。多びすに随にはござりきと答て、剣を取て自刺^{ラサス}

に、匈奴大に驚て取はないて^二、疵に葉をつけて助てけり。後、深窖^{タカ}の中に籠てをき^三てけり。僅に雪ばかりをくひて命をいきけり。七日をすぎて聞て^{ヒク}見に、蘇武つづがなし。多びす、蘇武を神なりと思ひなりぬ。北海の辺に^{（出）}て^四羊をかはするに、漢の節を失はず。わづかにいけるに似たりといへども、牡羊に乳を期^キして歳花空くかさなりにけり。武帝かくれ給て、昭帝の世になりて、帝の使、匈奴^五の国にいたりて蘇武をたづぬるに、はやく死にきと偽答へけり。いまだありとばかりをだに憲里の人にきかればやとおもふもかひなし。秋の空をむかへて、都のかたへゆく雁の足に文をむすびつけてけり。雁、南をさして飛去ぬ。帝、上林苑にあそび給おりしも、賓雁、書をかけていたれり。取て見給に、蘇武さりとよりのこのかた十九年の愁を書つけたるなりけり。限なく哀とおぼしめして、慥に蘇武をたてまつるべき由せめられて、其時かへしたてまつりてけり。あまたの年を隔てければ、顔の色衰て、頭白く成て、ありしにもあらずぞなりにける。

蘇武入胡年、漢武帝四十二年^年、本朝開化天皇五十九年也。蘇武帰^レ漢年、漢昭帝六年^年、本朝崇神天皇十七年也。

へだてこしみやこの秋にあはましやこしちのかりのしるべならずは（片42）
さても猶ふみかよふべき雲路かははつ雁がねのたよりならずは（平40）

【頭注】

本文 常惠教^漢使者^二言^一、天子射^二上林^ノ中^ニ得^{タリ}雁足^ニ有^二帛書^一。
一。言^レ在^二某^ノ沢^ニ中^ニ。由^レ是^ニ得^レ還^一。

【傍記】
ツチグラ

【校異】

- (一) はないて — はなちて〈岸〉
(二) 籠てをき — 籠てをき〈岸〉
(三) 開て — 開て〈岸〉
(四) 出て — 出て〈岸〉
(五) 匈奴 — 匈奴奴〈岸〉

45 五鹿嶽嶽(二八八)(鹿)

前漢 五鹿嶽(々々) (一) 或本此一段無之

五鹿君、字は飛字といへり。權威世にしられ、談説、名をえたる人也。朱雲と云人、口弁あり。これをくじくものなし。共に諍て事を論に、五鹿君つまりぬ。時人の云、五鹿嶽々たり。朱雲の角を折といへり。

くも井よりのはらの草をふく風にあれふす(一)しかのこゑさいゆなり (片43)

【校異】

- (一) 五鹿嶽(々々) — 五鹿嶽々〈岸〉
(二) あれふす — おれふす〈岸〉

46 鳴鶴日下・土龍雲間(四九・五〇)(題無し)

鳴鶴日下 土龍雲間

鳴鶴と土龍とは、共に才智きこえ高かりし人也。此二人かたみに見しらざりけり。時に(一)張華と云人の許に同時に行あひにけり。大才の人ゆきあふこと、ありがたき事也。よのつねの詞をいだすべからずと、かれこれをすゝめけり。時に一人はすゝみ、一人はしりぞくにたり。いづれもいみじくみえけり。土龍が云、我は雲間の陸土龍也。鳴鶴が云、我は日下の荀鳴鶴也。土龍又云、既に開青雲、靚白雉、何不張尔弓、挟尔矢。張公が云、荀何をそきやと。鳴鶴答て云、本は謂雲龍驂々と(一)。今は乃山鹿野麋。獸ハ微弩強。是以發遲と。張華大に咲て興にいりけり。

あづさゆみいるのゝをじかこゑたてごころよはしとつまにみゆらん (平41)

【校異】

- (一) 時に — 〈時に〉〈岸〉
(二) 驂々と — 驂々〈岸〉
(三) 微弩強 — 弱微弩強〈岸〉

47 楊宝黄雀(二六二)(露)

楊宝黄雀

後漢の楊宝、九歳にして華山の中に行て、二(一)の黄雀の疵をかうぶりて、蟻につかまれたるをみる。楊宝あはれび、取て家に返りぬ。箱の中に入て飼に、五穀をくはす。黄花の(一)ぶさを取てかひやしなひて、十日をすぎて疵いえにけり。朝に去て夜半に来て、箱の底にとまれる事、良久し。後に變じて黄衣の少年の人と成て来て、白環一双をもて来て、楊宝にあたへて云、

此玉をたくはへて^三、汝が子孫をかさねて三公となるべしと云て去ぬ。後にたがふ事なし。

続齊諧記云、黄衣童子、楊宝に向て再拜して云、我は西王母が使なりき。君が仁愛を感じて、白環四枚をあたふところなりといへり。

わがかどのわさだのすゝめたつ跡のいなばにをける露のしら玉（片44・平42）

【校異】

- (一) 九——七〈岸〉
(二) 二——一〈岸〉
(三) たくはへて——たへて^くはへて〈岸〉

48 公超霧市（二六一）（霧）

後漢 公超霧市

公超本字

後漢の公超は、長階が子なり。術道にかしこかりし人也。普く為^{ナス}二五里ノ霧^{ナレ}。学者随^テ之^ニ、所居成^レ市^ヲ。故^ニ花陰有^ニ公超市^ト。いへり。時に關西の人、裴優、三里のきりをつくれりけり。

へだつれどはなゆく^二色にみるものを人のこゝろのあきざりのそら（片45）・（平43）

【校異】

- (一) はなゆく——はれゆく〈岸〉

49 顏駟蹇剥（二八四）（槿）

漢武故事 顏駟蹇剥

漢の武帝、昔^シ輦^ニのりて、至^ニ郎署^ト、ひとりの老^〇の鬢眉白きを見て問ひ給に、顏駟申て云、文帝の時の郎たりきとなりの申けり。年はるかにたけにけるまで世にあはざりけるゆへを重てとはるゝに、答申云、文帝は文を好み給き。我、武をこのむ。景帝はみめを好み給ひき。我かほみにくし。君はわかきをこのみ給。我すでに老たり。この故に三代あはざるなりといへり。おほやけ、この詞を哀とおぼして、会稽の太守になされにけり。蹇剥^{非本文}、蹇は難也。陰也。剥は不利有欣、少人長也。つゐにかくはかなく秋にあひにけりよゝにしほれし庭のあさがほ（片46）

おもへたゞ日かげにあはぬ朝貌のよゝにしほれしおひの末ばを（平44）

【校異】

ナシ

50 鄭莊置駅（四二）（駒迎）

前漢 鄭莊置駅

【割注】

鄭莊は孝景帝の時の人也。毎^ニ五日^ト洗浴すと云へり。いはゆる一月に五日、一一^三年に六十日をいとまのひまとす。鄭莊、家に天下の名人を集めて、湯を沸して、昼はひぐらし夜はよもすがら、思さまに遊て心をよろこばしめけり。人々のゆきかへる馬のつかれをかへり見て、長安城の外の四面の郊にむま屋をおきて、伝馬をたてけるなり。

いくたびか駒ひく秋をむかへこしあふさか山の関の旅人（片

47）

もち月のこまひく秋をむかへきて思ふ人にもあふ坂の関（平45）

【割注】

私云、鄭莊字ハ当時、陳留ノ人也。又云、孝景ノ時為ニ舍人。

【頭注】

一

【校異】

（二）二——一（岸）

51 真長望月（五二六）（月）

晋書 真長望月

真長と玄度とはなさけふかく、色をしれる友也。花の春、紅葉の秋、志を通ぜずといふことなし。月のくまなき夜、真長、簡文が所^所に往て遊に、真長、愁然として歎^{シテ}云、清風朗月に恨らくは玄度がなき事をといへり。玄度をばすきものといへり。いかにせんともなき月に袖ぬれておもはぬさとにあり明のそら（片48）

【校異】

（二）所^所——許（岸）

52 伯瑜泣杖（四一六）（擣衣）

說苑 伯瑜泣杖

伯瑜、いとけなき時、心にたがふ事あれば、母つえしてうちけり。伯瑜、杖をうけて痛み泣ことなし。母老て後にまた伯瑜をうつに、伯瑜、大に痛みなきけり。母の云、我昔うちしに泣ことなかりき。今更に泣こと、我をうらむる心あるべしとあやしみいへり。伯瑜答て云、母のわかくてうちし杖はつよくあたりに身にしみしかども、いたまざりき。今^三杖を痛み恨るにはあらず。杖のよはくあたるにつけて、齡の衰へ力のつきはてたる事をうれへなくなりといへり。母これを聞に、せんかたなく哀と思ひけり。

秋のよの老のねざめにうつ衣よはるひゞきはいかゞかなしき（片49・（平47））

【校異】

（二）今——今も（岸）

53 軻親斷機（一三四）（虫）

軻親斷機

軻親は孟母也。孟軻が母也。孟母が家の傍にふるき墓あり。孟軻いとけなきおり、戯てはかをつきけり。母わが子にあしき事をならはさじとて、屋こぼちて外にうつりぬ。其傍に市あり。孟軻ものうりかふ事をしれり。母我子によからぬ事ならはさじと思て、又屋をこぼちて外へうつりぬ。その傍に学館あり。孟軻文をまなぶに器にたれり。此地を栖とすべしとおもひ定てけり。孟軻ものならひて帰来れるに、汝学ぶところいたれりやと問に、いまだしきよしを答けり。母機をりさして刀を^{とて}機をきり（生）てけり。孟軻驚き問に、汝が学問することは我機

をすてたらんがごとしと云に、孟軻ことほりを思ひ知て、勤学して(二)文に長じて、後に大儒の名をえてけり。

こえたてゝはたをるむしをうらみずは野べのにしきやあさくみえまし(平48)

【校異】

(一)勤学して——勤学にして(岸)

54 桓景登高(四三八)(菊)

純常語記
桓景登高

汝南の桓景、費長房に随て、道を学びて年をおくりけり。長房が云、九月九日、汝が家に禍あるべし。急に家(二)に(一)さりて、家人をして絹の袋に茱萸を入れてひぢにかけさせて、高きところに登て菊の花酒を飲べし。さて禍をさるべきなりと云に、桓景此をしへのまゝに山に登てかへりみるに、家の中の(鶏犬) (三)牛羊、ひと(と)きに死にけり。

けふはしもふもとのほなにゑひなましたかねのきくをかざゝざりせば(片51)

【校異】

(一)家(二)に(を)——家を(岸)

(二)鶏犬——猪鶏(岸)

55 離朱明目(三六二)(紅葉)

豊流本
離朱明目

黄帝の臣、離朱と云ものあり。離朱これなり。目明にして、毫

末を百歩の外に見し也。戦国策に云、離朱、千里の内の山の梢、野べの草の色をたどる事なし。馬を千里(不)の外のたてゝ耳の中まなぶたの中を見たるなり。

ながめやる千里の山のもみちばゝ軒のこずゑといはぬばかりぞ(片52・平50)

【校異】

ナシ

56 秦彭攀轅(二三五)(暮秋)

後漢
秦彭攀轅

秦彭、潁川(三)大守として任に赴て、人をあはれび国をいたはりけり。任をさる日、老たる、わかき、轅によりて、なく／＼おしめたひけり。

かぎりありてかへるならひはふりぬれどわきても秋のしたはしきかな(片53)

【校異】

(一)潁川——潁川(岸)

蒙求倭歌第四

冬部十五首

盛吉垂泣

初冬

関損衣单

霜

趙勝謝覽

寒蘆

羅含吞鳥

水鳥

震畏四知

落葉

鐘離委珠

露

蒼頡制字

千鳥

羊統懸魚

網代

原憲桑枢

時雨

孫康映雪

雪

王霸氷合

氷

郅都蒼鷹

鷹狩

陰方祀竈炭竈

阮孚蟬履ゲキ

祖約好財埋火

虞延剋期歲暮

57 盛吉垂泣會稽典錄〈三三六〉(初冬)

盛吉垂泣

盛吉は廷尉也。冬の節を迎ることに、誠をけるつみ人をコトヘリシル裁注けり。よな／＼見廻て二各が形をみるに、しもとのあとをやめ敷〈もえ〉るもあり三。かなぐ二〈た〉り三に三いためるもあり。おやを恋ひ子をこふるもあり。寒をうれへ飢をうれふるもあり。盛吉は筆を取てなき、妻は灯を取てなく。共に涙をながしけるなり。

としびのかげさゆる夜のあくるまで人のやみとふ冬はきにけり (片54・(平51))

【校異】

- (一) 見廻て —— 目廻て〈岸〉
(二) や〈もえ〉るも —— やもえるも〈岸〉
(三) かなぐ〈た〉り —— かなくさり〈岸〉

58 震畏四知後漢〈二八五〉(落葉)

震畏四知

楊震、東葉の太守として任に赴に、昌邑と云所をすぎけり。昌邑県の令、王密といへるは、昔楊震が秀才に举せし人なり。王密、金を懷に入れて、夜来て是をあたるに、楊震うけず。王密が云、むかしのなさをむくゆるなり、人のしるなければ、世にきこゆべきにあらず、とねんごろにいへり。楊震答て云、天

しれり、地しれり、汝しれり、我しれり、すでに四知ありとて終にうけず。

ちらさじといはせのもりの紅葉ばもあらしはそらにしらずしもあらじ (片55)・(平52))

【校異】

ナシ

59 原憲桑柎莊子〈四〇四〉(時雨)

原憲桑柎

魯の原憲、家貧くして、蓬の戸の蓬言不〇〇完本 あだなりければ、桑の木を柎とせり。板まには雨もたまらずして、ところ朽ぬばかりになりけり。常に絃歌に心をすましてのみぞなぐさみける。

あとゝづるくわ三のとざしの夕ぐれをしぐれならではとふ人ぞなき (片56)

【校異】

- (一) くわ —— く〈も〉わ〈岸〉

60 閔損衣单旧註云〈二九六〉(霜)

閔損衣单

閔損は孝子也。父、後の妻の腹にふたりの子あり。後の妻、閔損をにくみて、我ふたりの子には綿入たる衣をきせ、閔損には蘆の花を入たる衣をたゞ単へきせたり。冬の夜、父の車をよするに、手こどえて鞞ムカシイをおとしてけり。父、せめて罪にをこな

ふに、答る事もなし。後にちゝ、後の妻の、まゝ子のためな
けなきことをさとりえて、わかれ去なんとするを、閔損なげき
て云、母のおはするには一子こそさむけれ。母なくは三人の子
さむかりなむ云に、父ことはりを知て、思ひたゆみてけり。ま
ゝ母、このなさをうれしとおもひて、三人の子をおなじさま
に孚けり。（左、ヤシウ）

【割注】

よもすがらつるのけゝろもしもふ（毛）へて（二）あしのはがくれ
子をおもふ（平54）

【割注】

侍スル事三子平均成茲母。流布本

【校異】

（一）ふけて —— ふけて（岸）

61 鐘離委珠（四〇六）（霰）

後漢 鐘離委珠

後漢人史

鐘離意、字を子阿といふ。顯宗、位につきて、召て尚書たりき。
時に、交趾の（太平）守（一）ぬすめる物をあかふ（二）事あり。おほやけ、
この物を群臣にわかち給に、鐘離、たまをみて（三）、地に委けり。
公、その故を問ひ給に、答申て云、孔子（忍）渴（七）於盜泉之水、
曾參廻（三）車於勝母之閭（一）。是皆うき名をにくむ（四）なり、と申
せり。おほやけ、これを聞給て、賢なるかな尚書、とほめ給て、
くらの錢三十万（五）を賜て、右僕射になされにけり。

盜泉はぬす人のいづみとかけり。孔子、水にうへたれども、そ
の水をのみ給はず。勝母、閭は、母にかつさとゝかきたり。曾

參、いそぐ道なれども、そのさとをよぎてすぎき。みなその名
をいとふゆへなり。
此段に、歌落之。

【校異】

（一）交趾の（太平）守 —— 交趾の守（岸）

（二）あかふ —— あかふ（岸）

（三）みて —— えて（岸）

（四）ゆく —— ゆへ（岸）

（五）三十万 —— 三十万（三）（岸）

62 孫康映雪（一九三）（雪）

孫氏世錄 孫康映雪

孫康家貧くして油なかりければ、映雪書を読けり。わかゝり
し時少人に交りあそぶ事もなく、文にのみぞ心をめける。後
に御史大夫にいたりにけり。

よもすがらずだれをのみぞかゝげけるふみゝる（ヤシウ）にはの雪のと
もしび（片59）・（平56）

【校異】

ナシ

63 趙勝謝璧（三七五）（寒蘆）

史記 趙勝謝璧

平原君、字は趙勝。高樓に登て人家をみるに璧（ア）たる者、ころ
ぼひ（三）行て、水をくみけるを、樓の上の美人、声だかに咲ひけ

よひぢ (平 58)

り。翌日覽者^{よカ}ころぼひ^三来て、水をくみて門にいたりて美人の首を乞に、わらひて与えんといふ。後に又来てせむれどもちみず。門客^實ことく^三に去しりぞきにけり。其故を問に、君は色を愛して人をいやしんず^四。このゆへにさり退なり、といへりけり。志ふかき女なれば、いたはしくかなしとおもへども、門客の憤にたへずして、美人の首を切て覽者のやどにかけて是を謝しけり。其後門客かへりきたりにけり。

なにはえのあしのしたおれとにかくによしなきあまのくちずさみかな (片 60)・(平 57)

【校異】

(一)ころぼひ——よろぼひ〈岸〉^{よカ}

(二)ころぼひ——よろぼひ〈岸〉^{よカ}

(三)門客——門客〈岸〉^實

(四)いやしんず——いやしうす〈岸〉

64 蒼頡制字 (二二三) (千鳥)

淮南子 蒼頡制字

蒼頡は黃帝の史官也。賢才ならびなかりし人也。鳥の跡を見て文字をつくりしなり。鳥獸の跡を見て分理をさとりわきまへけりといへり。

蒼頡、字をつくりしかば、鬼夜哭しけりといへり。字に六体をわかつてり。一云象形、二云象事、三云象意、四云象声、五云転注、六云假借也。蒼頡之家^三在^三馮州衛泉陽亭^一、墳の高さ六尺也。書を好む者悉に此墓に来て、姓名を書いておきけり。はま千どりとびたつ跡をたよりにてふみはじめけるあまのか

【校異】

(一)家——〈象〉^家〈岸〉

65 王霸氷合 (四九四) (氷)

後漢 王霸氷合

漢記云、光武邯鄲より王莽が軍をさりて、南の方曲陽に下て呼沱^本をわたらむとするに、水はやく船なしといへり。左右の人をのゝきおそれけり。時に王霸を遣て^三みせらるゝに、はかりごとをめぐらして、氷固く結て渡ぬべしと申に、衆人大に悦てならびわたりにけり。

たび人のこまわたすべき浪ぢかはつらゝのうへとおもひなさは 駒わたすつらゝのみちをしらせずは思ひよるべき浪のうへかは

【頭注】

河^{コホリ}氷亦合^{アヘリ}云。氷柱ツラ、

【校異】

(一)呼沱^本——呼沱^本〈岸〉

(二)遣て——^遣けて〈岸〉

66 羅含吞鳥 (四二) (水鳥)

羅含吞鳥

晋書 羅含いとけなき時に、夢に、五色の馬^馬に飛て口に入と見てさめて後、むねの中に物を呑たる心ちしけり。羅含母に語に、汝文章あるべき由をあはせけり。其後才藻日々に^新なり、といへり。羅含が家の庭に、俄に蘭おひいでけり。徳行幽感と思へり。なづけて書帋^帋〈章〉^章といへり。

水とりのうきねの夢のなごりよりな^七のこ^情ろもふかくなり
にき（片62）

【校異】

（一）馬^馬——鳥〈岸〉

（二）〈章〉^章——草〈岸〉

67 羊統懸魚〈六八〉（網代）

後漢 羊統懸魚 私云 羊統 字ハ襄祖也。

後漢の羊統は南陽郡の守也。羊統が許へ主簿^{ナマシキ}生魚を送れり。羊統うちへも取れず庭にかく。程へて主簿、又魚を送れり。もとの魚をみせて、其心をとめてけり。

いとほるゝみをうぢ川のあじろ木にねたくぞひをの思ひより
ける（片63）

【校異】

ナシ

68 郅都蒼鷹^鷹へ^二一^一（鷹狩）

郅都 都蒼鷹

【割注】

郅都、直諫にして人に恐るところなく、時の大臣をも横^{ヨコシマ}なる

事あれば、憚ところもなくいひそしりけり。世の人目をそばめて蒼鷹と名づけてけり。郅都、雁門の太守に遷て、匈奴をしたがへけり。匈奴、木偶人を作て郅都と名て、弓箭をとり、馬をはせてくるに、時にのぞみて、郅都ぞと思ふより、心まどひ手わなゝきて箭を放事あたはず。人におちられたる事かくなむありける。

はしたかのかげうつるらしいり日さすかたのゝ^原〈草〉^原に人
さはぐなり（片64）

【割注】

河東人也。私云、郅都、字ハ巨中。

【校異】

（一）草^原——草〈岸〉

69 陰方祀竈^竈へ^四二^二（炭竈）

後漢 陰方祀竈 後漢人也。

陰子方、孝養ふかゝりし人也。年のくれに黄牛^ニをもて竈神をまつりて、三代の孫にいたるまで富さかえけり。

いまぞしるよにすみがまのしるしとて行すゑとをくたえぬけ
ぶりを（片65）

【校異】

（一）黄牛——黄帝〈岸〉

70 阮孚蠅履 祖約好財へ^三三^九・^三四^〇（埋火）

晋書 阮孚 蠟履 祖約好財 晋代人

阮孚はあしだを好み、祖約は財を好みし人也。常に是をいとむ事相同じ。人ゆきて二人が得失をはかるに、まづ祖約が許に行てみれば、財屏当して、小帳本「簾」をうしろにあてゝ、身をかたぶけて、かくしそばめて、其けしき心よからず又殿に、阮孚が許に行てみれば、火をふきて蠟履、なげきて云、しらず、一生のうちにいくばくの履をかもちゐんとする、といへり。神色恬然として閑暢せり。此時に阮孚は得、祖約は失と定てけり。

屏当声去屏当二ともかけり、たゝみ、のし、をさだむるなり。きえかへりおもふもかなしうづみ火のいけるあしたのほどもなきよを（片 66・平 60）

【校異】

（一）に——次に〈岸〉
（二）屏当——屏当——〇当〈岸〉

71 虞延刻期〈三三五〉（歳暮）

後漢 虞延 剋期 後漢人也。

虞延は細陽の令也。獄舎にいましめをかれたるもの、数もしらず多くして、年のくれに臨て、幽閉をかなしみ故郷をこふる心ねんごろなりけるを、哀び痛て獄門を開て、をの／＼をゆるして、其ころほひまでとためて、家に帰しすゑけり。罪びと、虞延が仁徳をあをぎて、期をたがへず獄にかへり来にけり。家にありて病あるものゝ、獄に来て死ければ、外閑外三にうづみ、わざの事をおへて、あはれび訪ひけり。後に大尉にいたれり。

としのくれはしものとざしをとくものをあくる日かげのなきけなりけり（片 67）

【校異】

（一）病あるものゝ——病あるものは〈岸〉
（二）門本閑外——閑外閑外〈岸〉

〔附記〕

本翻刻は、二〇一一年度大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費（Ⅱ）の成果の一部である。翻刻の掲載許可を賜った山口県立山口図書館に厚く御礼申し上げる。また、蒙求和歌輪読会（二〇〇六年四月開始）の参加諸氏、特に人形寺英利子氏には編集の過程で多大な協力を得た。ここに附記し、深謝申し上げる。

（一）やま じゅんこ・天理大学文学部講師
（たけし） かずき・立命館大学非常勤講師
（つた） きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授
（はまなか） ゆうこ・京都学園大学非常勤講師
（なかし） まり・洛星中学校非常勤講師
（もりた） たかゆき・南山大学人文学部講師
（やまなか） のぶゆき・本学文学部非常勤講師